

フレデリック・ダグラスと 女性の権利の根拠づけ

清水 忠 重

女性学はわたしの専門に直接かかわってくるテーマではないが、19世紀のアメリカ史をやっていると、女性運動の活動家たちはそのほとんどが奴隷制反対運動から出発したひとびとであったし、奴隷制反対運動のなかで女性の権利にめざめたひとびとであったから、そういう意味からいえば、わたしのやっている奴隷制反対関係のことがらも女性学の分野とある意味でむすびついていることになる。

19世紀に活躍した黒人指導者のひとりにフレデリック・ダグラスというひとがいるが、このひとは黒人の思想家として、19世紀を代表する人物であっただけでなく、みずから「女権派男性」(“a woman's-rights-man”)などと称したひとであり、女性の権利についてとりわけ積極的に発言したひとであった。

最近このダグラスの女性の権利に関する発言をたどってみたことがある。人間(黒人、女性)の権利を云々するばあい、時代や国によって、もちだされる論拠はいろいろとちがってくるのであろうが、19世紀アメリカの論客たちはまだ自然権のフレームを引きずっていたので、自然(資質)をもちだすのをつねとした。そしてダグラスもまたその例外ではなかった。

この自然権思想のばあい、権利は自然(資質)の度合いに応じて賦与されるという論理になっているので、この土俵の上で男女同権を要求するばあい、男女の自然(資質)がおなじだということを基盤にすえて議論を展開しないことにはあまり説得力はないと思うのだが、ダグラスはそういうやりかたはしてなくて、一方で男女の異質性を説き、他方では男女同権を要求するという首尾一貫しないやりかたをしている。かれが男女(の性差や異質性ではなく)同質性をベースに敷いて、その上に権利の要求をもちだすようになるのは、亡くなる直前の19世紀末のことであり、それまでの数十年間、いわばバラバラなかたちで所論を展開していたことになる。

この論法のばあい男女の同質性を強調すれば、権利の平等もそれだけ要求しやすくなるわけであるが、しかし育休や福祉面で女性に有利な主張を展開しようとするれば、むしろ逆に異質性や性差をもちだしたほうが

説得的な面もある(20世紀半ば過ぎになって再び女性性や性差を強調するというぶり返しがやってくる理由のひとつはここにある)。したがって資質内在論のばあい、同質性・異質性いずれの側に軸足を置くにせよ、痛しかゆしの両面に直面することになるとみてよい。ただし、もし資質内在論の発想を否定して、人種や性など差異に依拠する主張はすべて特定の権力関係のなかでつくられた架空のものだといってしりぞける立場をとるとしたら、どうなるであろうか。つまり資質の論理をしりぞけたばあい、女性の権利の根拠づけはどういうふうになされるべきであろうか。

(大学研究所長、文学部教授：西洋史)

連続セミナー「デュエット～男女の共演～」を担当して

【第1回：2003年6月6日】……………三田地里穂

●「舞台芸術<シアター・アーツ>

～女と男のドラマティック・ハーモニー～

現在の演劇では「男女の共演」は至極当たり前のようになっている。しかし、女性が女優としての表舞台で、劇作や演出等の裏舞台で、今日のように活動できるようになるには長い年月が必要であった。今回のセミナーでは、通常は「結果」だけを見て下さる観客の方々とともに、演劇の誕生から今日までの道程を創作過程に重ねつつ辿っていく構成とした。

演劇の2,500年余の歴史で、女優が舞台に立つことを許されたのは17世紀後半になってからである。シェイクスピアの描いた女達は全て男優が演じた。しかし、後日この「女」達を演じた女優は精神的にも身体的にも「強さ」を培う結果となった。自由な女性への第一歩は19世紀後半に「人形の家」のノラを送り出したイブセンにより印された。「妻や母としてよりも自分への義務が最も大切である」と言い切った家を出たノラは、各地での上演禁止を乗り越えて逞しく生き抜き、現代演劇の礎となった。現在の欧米演劇教育の基礎は20世紀初頭、米国の男性劇作家が女子大で始めた一つの授業である。後日そこに参加した男子学生の中からオニールが誕生した。しかし、劇作や演出に女性が本格的に進出できたのは70年代後半である。

人間を追求していく演劇においては男女の共演なくして真の作品は生み出せないと改めて感じた。男女の

枠を越えた人間の「創造力」と「想像力」こそが演劇の始まりである。戯曲の種を生み出す創作課題を通してそれを実感して頂けたなら幸いである。託された課題からその可能性を発見できたのは私の喜びであった。

(シアター・クラシックス 主宰、舞台演出家)

【第2回：2003年6月13日】……………津上智実

●「声の競演としてのデュエット」

今回の共通テーマ「デュエット」について、音楽の分野から様々な事例に即して考えることで、その本質と魅力に迫ろうと試みました。音楽において「デュエット」は二重唱と二重奏を意味しますが、いずれも拮抗する二つの声（声部）の掛け合いによって緊張感に満ちた豊かな音空間を実現します。まず典型的な愛の二重唱においては、二人が同じ言葉を同じ旋律（オクターヴや三度や六度の平行で動く）で歌うことによって頂点が築かれます（プッチーニ＜ボエーム＞、モーツァルト＜ドン・ジョヴァンニ＞）。次に同性による二重唱を考えると、テノールとバリトン（ヴェルディ＜オテッロ＞からオテッロとイアーゴ）、ソプラノ同士（モーツァルト＜フィガロの結婚＞から「手紙の二重唱」）、さらに後者との類比でヴァイオリン同士（コレルリ＜トリオ・ソナタ＞作品3-12）の例が挙げられ、二つの声の絡み合いによって醸し出される緊張感とその解決によってもたらされる到達感がデュエットの魅力の源であると分かります。またバロック・オペラにおける愛の二重唱（モンテヴェルディ＜ポッペアの戴冠＞、グルック＜オルフェオとエウリディーチェ＞）は、当時においては男（カストラート）同士によって歌われ、今日においては女同士、あるいは片方の声部を1オクターヴ下げて男女で歌うかのいずれかしかなく、そのトランス・ジェンダー的な要素によって我々の意識に潜む男女観をあぶりだします。最後にモーツァルト＜魔笛＞から「男と女、女と男は手を携えて神の高みにまで上る」を聞いて締めくくりとしました。（音楽学部教授：音楽学）

【第3回：2003年6月20日】……………浜下昌宏

●「美術作品に見る『ふたり』の現象学」

標題の中にある「現象学」という用語は、難しい意味を持ちながら、しかしごく普通の思索で理解できることを示すために、この語の説明から話を始めた。見えている「ふたり」とは必ずしも仲むつまじい恋人や夫婦の関係だけではない。暴力的関係もあれば子育てのような協働関係もある。また、西洋美術においては

ヴィーナスをめぐる諸群像は必然、キューピッドをはさみながら「ふたり」連れとなる。カップルの姿は洋の東西を問わず、我々の注目を引く。そうした男女間の関係を、セザンヌ、ティツィアーノ、コレッジオ、アングル、ゲインズバラ、ルノアールといった西洋の画家、そして菱川師宣と鈴木春信の浮世絵の作品例を挙げながら解説した。画像は容易に眼に訴える。しかし、作品の細部には作画上の慣例と深慮が込められている。それは作品解釈が鑑賞のみならず、我々の現実理解にもつながる視点である。さらにもうひとつ大事な点は、芸術と現実とは異なるということ。しかも、芸術はときに現実を先行し、ときに実情から離れて理想像を描き、模範を示す。作品の中の「ふたり」は美的に昇華されている。そこに美術の美しさがあると同時に、我々には幻想による錯覚を戒める美術のワナがある。——受講者の感想文を読むと、以上のような私の主旨を見事に捉えておられる方がいて、感銘を受けた。こうした公開セミナーの受講者には、ときにたいへんな教養人がいるものである。また、「静かで流れるような90分でもとてもいい時間でした」という感想も頂いた。たしかに忙中に通常のカリキュラム以外の講義は負担になるが、報われた思いがする。

(文学部教授：美学)

【第4回：2003年6月27日】……………関原綾乃

●「対話するダンス—ジェンダーにおける身体表現」

6月27日は、ダンスをテーマに、講堂にて初のダンス公演を行った。講座のテーマは「デュエット」ということであったが、我々は今回の作品をあえて男1人、女3人で構成し、“男”と“女”という2者の存在も含め、“自己”と“他者”をテーマに、上演させていただいた。

今回上演された作品が、一般に想像されるダンスと全く異なっていたことに戸惑いを感じた受講生も少なくなかったように思う。

現在のパフォーマンスは、個々の表現手段がより自由に、かつ、多彩になっているが、その中で、どれだけ観客に作品を深く印象付けられるか、熟考する必要がある。我々「flâneurs」も、一人一人の特性を作品の中に活かし、かつ、個人同士の共存の面白さを反映させるために常に模索し、頭を搾る日々を送っている。そうした毎日の中で生まれた我々の作品に観客が触れることで、流れる日常の中でふと立ち止まり、ほんの少し、「何かを思う」きっかけとなれば、幸いだと思っている。

<p.(4)に続く>

『女と男』

身をもって体験した性差の感触

池 見 陽

息子が生まれたころから、ジェンダーや性差ということに関心をもつようになってきた。まだ1歳程度の幼児であった息子をダッコしているのはたいへんだ。しばらくダッコしていると、肩や腕の筋肉がしびれてくる。腰も痛くなってくる。息子もまた、じっとは抱かれていない。肩によじ登ろうとしたり、あっち、こっちに注意が向くたびに、「アノヒータン！」(彼特有の幼児言葉で「鳥」という意味)とか、何だかわけのわからないことを叫びながら興奮して腕の中で回転したり、蹴ったり、跳ねたりしているのである。あまりにもよく動くので、そのうちに靴は脱げ落ち、靴下は半分脱げてブラブラ、服は乱れてお腹も背中も露出している状態になる。女房との待ち合わせ場所に到着したころには、父子ともにポロポロである。女房にダッコを交代すると、どうしてこんなに器用に靴下が脱げないように、服が乱れないようにダッコできるのか、そして、どうしてあの細腕で長時間ダッコしてられるのか、不思議に思えてしょうがなかった。確かに、筋肉の構造

が男女では異なることは知っていたが、器用さの違いや幼児との関わり方の性質の差には驚くほかにない、と驚きながらダッコからの開放感に満ちあふれた。

しかし、さらに大きな驚きは息子と同じころ生まれた近所の女兒をダッコしたときのことである。ゴツゴツした息子に比べて、その子はフワッと腕の中に収まった。本当に柔らかいと感じた。また、息子のように腕の中で回転したり、蹴ったり跳ねたりせず、肩によじ登ろうともせず、じっとしているのだった。ダッコした感じが、まったく異なっていた。こんなに違うのか！と身をもって知ったのである。

その後、子供だけでなく、大人の行動を見ても、違いを感じるが多かった。さらに、愛犬の行動や愛犬と人間の関わり方を見ても、性差があるように思えてならないことが多々あった。もちろん、いろいろなことを性差の色眼鏡で見せしめ、何でも性差のせいにしてしまっ、個性が消滅してしまう危険性があるので注意しなければならないが、人間に対する興味の一つの視点として、ジェンダーについての素朴な観察を続けたい。

(人間科学部教授：臨床心理学)

『女と男』

谷 祝 子

ある幼稚園の保育室です。身ぶり表現を主座にしているこの幼稚園は、梅雨の季節は、『つばめ』を題材にしてよく遊びます。巢に子つばめが4羽いて、親つばめが餌をもって帰ってどの子にあげたとか、小さかった子が大きくなっていたとか、見てきた巢の様子を話し合った後、つばめになって表現をします。「格好いいお父さん飛んで見せて」と先生がいうと、男の子たちがお父さんつばめになって飛びます。さすがお父さんの風格があります。飛ぶスピードも速いです。「次、お母さんつばめさん」、女の子たちが飛びます。やさしいお母さんつばめです。ものまねやパントマイム・定型的なリズム運動ではありません。それぞれにつばめになって自己を身体で語ります。つばめの家族と自分の家族の生活を重ねながら、お父さん・お母さんの役割を感じて？表現するかわいい子どもたちです。

次は成長した学生の話です。男女共学のK大学で社交ダンスの授業をしています。社交ダンスという

のは男性が女性をリードして踊ります。「女性からは誘えないのだから、誘ってあげてよ」、その声かけにやっとな男子学生が女子学生を誘いに寄っていきます。大学生ともなるとテレがあり、最初は幼稚園で見るとつばめのお父さんほどの凛々しい、格好良さはないのですが、授業が進むにつれリードして踊る側、リードされて踊る側と役割を楽しみながら、紳士淑女とまではいかなくても段々格好がついていきます。ちなみに私はいつもリードして踊る側です。毎時間女子の方が多いのです……。

先日テレビで、定年退職後に初めて家事をする男性、奥さんが外に仕事に出て、家事と子育てをする若い男性が紹介されていました。表情が二人とも生き生きとしていたのが印象的でした。男女の役割について、ゲストのコメントは、「できる人ができることを全力でやればよい」と言われた。あの子どもたちのお父さんつばめや男子学生のなかに、将来はお母さん役のつばめになる可能性もあるのかな？？

その反対も……？と思う次第です。

(体育研究室教授)

今回の私達の作品を、「面白い」と思って下さった方がいらっしゃれば、それは、本当にあり難い。しかし、その反対の思いをされた方々の中にはおられたことと思う。芸術に対する考えはそれぞれであり、私達の踊りが正直、「つまらなかった」という思いがあったというのも事実として受け止めている。とはいえ、やはり、このセミナーをきっかけに身体表現について少しずつ興味を持ち始めて下さる方が出てくることにも、ほんの少し期待している。

最後に、このダンス公演に際し、ディレクターの上西先生をはじめ、たくさんの方々にご協力いただき、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。(コンテンツポラリー・ダンスグループ<flâneurs>メンバー)

2003年度前期活動報告

連続セミナー「デュエット～男女の共演～」【定員50名】

会場：神戸女学院大学ジュリア・ダッドレー館104教室

*但し、6月27日のみ神戸女学院講堂

〈第1回〉2003年6月6日(金)

「舞台芸術<シアター・アーツ>

～女と男のドラマティック・ハーモニー～

講師：三田地里穂氏

(シアター・クラシックス主宰、舞台演出家)

〈第2回〉2003年6月13日(金)

「声の競演としてのデュエット」

講師：津上智実氏

(神戸女学院大学音楽学部教授：音楽学)

〈第3回〉2003年6月20日(金)

「美術作品に見る『ふたり』の現象学」

講師：浜下昌宏氏

(神戸女学院大学文学部教授：美学)

〈第4回〉2003年6月27日(金)

「対話するダンスージェンダーにおける身体表現」

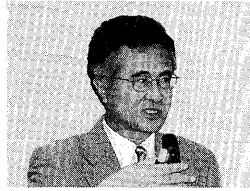
講師：コンテンツポラリー・ダンスグループ

<flâneurs> (秋山雅近氏 高橋温子氏
福本佳津氏 関原綾乃氏)



三田地里穂氏

津上智実氏



浜下昌宏氏



<flâneurs>ダンス公演

[受講者:56名 平均出席者:39名 修了証交付者:38名]

特別講演会

2003年7月4日(金)

「女性学を越えて」

会場：神戸女学院講堂

講師：北條文緒氏

(東京女子大学
性学研究所長)



北條文緒氏

[出席者:120名]

— 2003年度後期講演会等のご案内 —

■学外講演会

会場：宝塚市立男女共同参画センター・エル(宝塚市)

※阪急・JR「宝塚」下車スグ、「ソリオ2」4F

〈第1回〉2003年10月30日(木) 14:30～

「老年期のメンタルヘルスを考える

—夫婦で『もうひとつの人生』を支えあうには—

講師：荒賀文字子氏

(神戸女学院大学文学部助教授：社会福祉学)

〈第2回〉2003年11月29日(土) 14:30～

「近未来の食生活」

講師：寺嶋正明氏

(神戸女学院大学人間科学部教授

：食品分子機能科学)

★女性学インスティテュートは図書館本館1階にあります。図書の閲覧・貸出希望者はT-14・13室まで。(帯出・返却の手続きはT-14室で行ってください。)

2003年度女性学インスティテュート編集委員

三杉圭子、清水忠重、塩見尚史、高橋雅人、上西妙子
(委員長)(ABC順) 編集事務：豊福裕子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

E-mail:gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/